タイのへき地における重度・重複障害児への支援に関する研究

令和３年度入学
熊本大学大学院　教育学研究科
教職実践開発専攻　特別支援教育実践高度化コース
梶原　隆裕

実践報告書要旨

タイは 2010 年代に入り開発途上国から中進国入りを果たし，障害児・者の教育・福祉分野においても，東南アジアや大洋州のリーダー的存在として，第三国への支援を行うに至っている。一方で，いまだ国内の障害児の教育への完全アクセスが実現できていない。近年の新型コロナウイルス感染症のまん延（コロナ禍）によって，国内地域格差が激しいタイにおいて，特にへき地農山村では，障害児の教育の停滞が深刻ではないかと考えた。

そこで，タイのへき地農山村に居住する障害児の教育状況を把握するため，2022 年２月～３月に各地域の障害児教育の拠点となっている特殊教育センターを訪問し，予備調査を行った。その結果，山岳少数民族の居住地域や離島などのへき地においては，専門職員の不足，また，アクセシビリティの困難，地域社会の障害への理解不足等により，これまで多くの障害児，特に，重度・重複障害児が教育にアクセスできない状況であったところに，コロナ禍の影響が重なったことを把握できた。

予備調査の結果を踏まえ，本研究では，以下の２つのねらいをもって実践研究を行った。

１つ目は，交通や通信環境などが整備されていない地域においても，保護者や関係機関の協力を得ながら提供できる基礎的な教育方法の提案・実践である。そして２つ目は，障害のある人たちも地域社会の中で共に生活することができるような体制づくり，すなわち，地域社会との連携の構築をめざす提案・実践である。

本研究の目的は，①タイのへき地の重度・重複障害児の個々のニーズに即した活動の提案をし，②関係者との PATH（Planning Alternative Tomorrow with Hope）ミーティング，ワークショップ等でビジョンや情報を共有することにより，継続的な教育へとつなぐ道筋を見出すことである。なお，実践研究の場として，特殊教育センターの協力を得られたトラート県の離島，チャーン島を選定した。

教育実践Ⅰとして，2022 年８月にチャーン島に赴き，障害のある子どもたちの各家庭を巡回訪問し，個々のニーズに即した活動内容を模索しながら教育実践を行った。併せて，地域関係者を交えた PATH ミーティングの場を設定し，対象児の未来について，関係者と共有する場を設けた。

次に，教育実践Ⅱとして，2022 年 12 月～2023 年１月にかけてチャーン島を再訪し，計画した活動の提案・実践，また関係機関の参加と協力を得て，障害児支援全般に関するワークショップを実施し，参加者からのコメントも収集した。

教育実践Ⅰの成果としては，個々のニーズに即した活動を提案・実施することで，特に，重度・重複障害児への支援に対する，保護者の意識に変化が見られたことである。また，PATH ミーティングを通して，地域関係者との連携が図られ，対象児の未来についての具体的な取り組みと，関係者による役割分担に関する提案ができたことである。

教育実践Ⅱの成果としては，ワークショップ後の参加者のコメントから，障害に対する理解の変容が生まれ，地域社会全体の課題として捉える意識が高まったことである。

これらの教育実践を通して，開発途上国における重度・重複障害児への基礎的な教育の必要性と保護者や関係機関との協力の在り方を共有した。また，地域社会における障害者の共生をめざす体制づくりの基盤となる連携構築の端緒を創出した。

しかしながら，本研究の限界は，活動の継続性にあり，今後の課題として関係機関との連携をさらに深め，地域全体で支援を継続できるようなシステムづくりが挙げられた。